令和元･2年度の協議のまとめ

令和３年３月
伊賀地域高等学校活性化推進協議会

１　これまでの経緯

（１）平成２４年度までの協議

伊賀地域では、中学校卒業者数の減少に対応するため、平成 16 年度から協議会を設置し、県立高校のあり方について検討を進めてきました。平成 18 年９月にそれまでの協議を総括し、伊賀市内の専門高校３校を統合して新総合専門高校（伊賀白鳳高校）を設置することをとりまとめるとともに､少子化が進む平成 27～33 年度頃には伊賀地域の県立高校は４校程度となることをイメージ化しました。

その後も少子化が進行することから、平成 22 年度に協議会を再開し、当地域の県立高校のあり方について検討を行いました。検討にあたっては、地域の中学校卒業者の進路状況や学習ニーズ等を踏まえるとともに、保護者や市民を対象とした説明会を開催して検討状況を報告し、そこで出された意見も参考としました。

平成 24 年度までの検討の結果、平成 28 年４月に名張桔梗丘高校と名張西高校を統合して普通科をベースとした新しい高校（名張青峰高校）を設置し、両校の良さを継承・発展させるとともに、広い視野とコミュニケーションスキルを身につけ、地域や世界で活躍できる人材を育成することとしました。

（２）平成２５・２６年度の協議

伊賀地域における中高一貫教育の実施について、そのメリット・デメリットや全国の事例等を踏まえて協議を行いました。「ゆとり」をもって学ぶことができる等の大きな利点がある一方で、少子化が進む中で、当地域の小中学校に与える影響の大きさが心配される等の課題があることから、新たに中高一貫教育校を設置することは難しいと結論づけました。

また､特別な支援を必要とする子どもたちの県立高校への受け入れと支援について、現状や課題を踏まえて協議を行いました。

（３）平成２７年度から平成３０年度までの協議

特別な支援を必要とする子どもたちの県立高校への受け入れと支援について引き続き協議し、進めるべき取組について、「特別な支援を必要とする子どもたちの県立高等学校への受け入れと支援について（平成 28 年３月）」としてとりまとめとしました。

地域における学科の適正な配置の観点から、専門学科の学科・コース、総合学科の系列について、協議を行いました。「土木・建築等を学ぶことができる学科・系列がないので、ニーズを検証したうえで、学科等の見直しも検討していく必要がある。」という意見（平成 27 年度第３回協議会）が出されたことなどから、地域の中学生や産業界のニーズを把握するためのアンケート調査を踏まえ、建築・土木コースの設置について、学校と県教育委員会で検討し進めていくことを確認（平成 29 年度第１回協議会）しました。（平成 31 年４月、伊賀白鳳高校に建築デザイン科設置）

伊賀地域の県立学校を志望する地域内の中学生が減少傾向にあることから、学校の活性化・魅力化について協議しました。

２　令和元･2年度の協議

これまでの協議会での協議や高校生の現状、国の教育改革の動きを共有し、中学校卒業者数の減少や進路状況など当地域の県立高校の取り巻く状況を踏まえ、これからの高校生に育みたい力や県立高校のあり方について協議しました。

（１）子どもたちに育みたい力について

地域の子どもたちが、これからの急速に変化する社会を生きていくために、どのような力をつけていくことが求められるかとの視点から、自分や他者を尊重し、多様な人々と協働しながら社会の創り手となれる力を育む教育、学校が地域社会と接点を持ち多様な人々とつながりを保ちながら学ぶことのできる環境づくりなどについて協議しました。

（主な意見）

○　指示されたことをやるだけでなく、自ら課題を見つけて解決していこうとする力が求められている。最近の若者には、忍耐力がついてきたと思う一方で、向上心に欠ける印象を受ける。学校での学習にとどまらず、地域社会にも関心を持ってもらいたい。そのためにも地元企業が高校の教育活動にもっと参画すべきである。

○　これからは、よい大学に進学しよい会社に就職すれば、その先は安泰という社会ではなくなっていくので、失敗を恐れず挑戦できる力がますます重要になる。

○　外国の子どもたちと比較すると、プレゼンテーション能力やＰＲする力の向上が必要であると感じる。

○　高校には課題のある子どもたちや支援を必要とする子どもたちも共に学んでおり、教員は様々な工夫をしながら教育活動を行っている。そんな中、「自立する力」と「共生する力」が大切であると感じており、課題を解決する力や情報を活用する力、コミュニケーション力を育む教育を進めたい。

○　子どもたちが社会の変化や身近な課題を、どれだけ自分事としてとらえられるかが重要であり、そのためには課題の解決に向けて、友達と共同して取り組む経験を積むことが必要である。

（２）多様な子どもたちの状況と学習環境への対応について

地域の中学生の学習状況や進路状況について、中学校長等からの聞き取りを実施し多様な生徒の現状を共有しました。多様化する子どもたちの学習ニーズを踏まえ、地域の子どもたちにとって望ましい学習環境について協議しました。

（主な意見）

○　中学校では、不登校傾向の子どもたちに対し部分登校や個別の学習支援を行っている。このような子どもたちの多くは、昼間の時間帯に登校するのが難しいため夜間定時制へ進学したり、サテライト校で個別指導を行う私立の通信制高校へ進学したりする。また、特別な支援を必要とする子どもたちの中にも、特別支援学校の高等部ではなく、地域外の通信制高校へ進学し高校卒業の資格取得を目指す子どもたちもいる。それらの際、県立の通信制高校は、単位認定のハードルが高いことから、目的意識の高い生徒を除いては進路指導の際に積極的に勧めていない。

○　伊賀市では、通信制高校へ進学する子どもたちは比較的少ないが、それは地域の県立高校が多様な生徒を幅広く受け入れ､きめ細かく指導しているからではないか。

○　全国的に見ても、私立のＮ高等学校のような広域通信制の高校へのニーズは高まっている。多様な生徒を幅広く受け入れる広域通信制のような学校を県立で設置すれば、中学校卒業者数の減少が見込まれる中でも県内外から広く生徒が集まるのではないか。

○　多様な学びを求めて地域外の通信制高校などへ一定数の子どもたちが進学する状況があるが、地域に昼間定時制の高校があれば、そういった子どもたちのニーズにも地域内で対応できる。その際、通信制の機能も持たせることでより幅広いニーズに応えることができる。

○　高校受験に近い時期に来日した外国籍の子どもたちは、日本語を一定習得してから過年度で高校へ進学したり、昼間に日本語教室で日本語を勉強しながら夜間定時制高校で学んだりする生徒が一定数いることから夜間定時制は必要である。

（３）地域の県立高校のあり方について

伊賀地域の中学校卒業者数は、今春（令和２年３月）から令和８年度末（令和９年３月）までの７年間で、伊賀南部ではほぼ増減がないものの、伊賀北部において 110 人程度の減少が予想されることを改めて共有し、伊賀地域の県立高校について、さまざまな子どもたちの進路希望や学習ニーズを踏まえながら、学習環境をよりよいものとするため、どのような学習内容、規模と配置が望ましいかについて協議しました。

（主な意見）

○　「誰ひとり取り残さない」という視点から多様な選択肢をできる限り提供するには５校を維持することが望ましい。その際は、不登校や学び直しが必要な生徒など“学習弱者”への配慮を大切にすべきである。

○　地域や地域内の企業にとってより多くの学校との連携が活性化につながる。財政的な面を置いておいて理想を言えば、現在の県立高校の校数が維持されることが望ましい。

○　生徒の減少や交通の不便さがある中で､現在のままの学校数を維持するとなると、各高校の定員の充足が難しくなり活性化や魅力化が進められなくなることを危惧している。

○　学校運営を考えると学校の規模は少なくとも１学年４学級は必要である｡一方で、あけぼの学園高校は２学級だからこそ、不登校傾向の生徒や学び直しが必要な生徒たちが安心して学び意欲的に活動できている。多様な子どもたちが活躍し自信をつけることができる学校としてこれからも残してほしい。

○　全日制高校５校の維持と昼間定時制や通信制高校の設置を別々に考えるのではなく、複数の機能を併せ持った学校を考えることができないか。

○　子どもたちの多様なニーズに応じた数多くの選択肢を用意することは大切であるが、同時にそのことによる学校運営上の課題やデメリットも明らかにして踏まえながら、県立高校のあり方を考える必要がある。

○　生徒数の減少を客観的に判断すれば４校での再編は避けられないのではないか。４校に再編する際は、その学校の学びや果たしている役割、良さをどの学校でどう引き継いでいくのかを議論することが大切である。

○　交通事情から地域外に進学しにくい子どもたちもいる。地域の子どもたちが地域の学校に進学できる環境づくりが大切である。

３　県立高等学校のあり方（当協議会の考え方）

令和８年度末（令和９年３月）までに、伊賀地域北部で中学校卒業者数が減少していくことが予測されることから、北部で２学級（80 人）程度の定員減が見込まれます。このような中、協議会では伊賀地域における今後の県立高校のあり方について、現行５校の維持、４校への再編、多様な生徒の学習ニーズに対応した新しいタイプの高校の設置などの意見が出されました。

これまで、伊賀地域の県立高校は、地域の人材育成に貢献する学校、大学等への進学に対応した学校、多様な子どもたちが安心して学び意欲的に活動できる学校、ＩＣＴを活用した学びやグローバルな活動に取り組む学校など、それぞれの特色や魅力を生かしつつ地域と連携しながら、子どもたちのよりよい学びの実現のためにその役割を果たしてきました。今後も子どもたちの幅広い学習ニーズに対応し、多様な進路希望の実現のためにできる限り多くの選択肢を確保する観点から、当協議会としては、当面の間、現在の５校を維持することが望ましいと考えます。その場合、北部の高校において定員減を行う必要があるとともに、生徒数が減少していく中で、現状のままの学習内容を維持することは難しいことから、伊賀地域全体を見通した学習内容の検討をする必要があります。

一方、令和９年３月からの２年間で、中学校卒業者数がさらに 90 人程度減少することが予測されており、この減少に従前のとおり各校の学級減で対応していくと各校の小規模化が一層進行し、部活動や学校行事も含めた活性化や魅力の維持向上が難しくなることが考えられます。このことから、現在の５校の再編を含めて検討し、その結果を令和７年度頃までに明らかにする必要があり、その際は、それぞれの学校の果たしている役割や学びの選択肢をどう整理し分担していくかに加え、学習ニーズを踏まえながら各校の特色化・魅力化を見据えて検討を進めることが求められます。

また、不登校傾向の子どもたちや特別な支援を必要とする子どもたち、日本語の習得を要する外国にルーツのある子どもたちなど、多様な学習ニーズに応える新しいタイプの学校の設置に関しては、子どもたちの学びのスタイルなどについて、どのようなニーズがあるかを的確に捉えるとともに、当地域の夜間定時制課程が果たしている役割を考慮しつつ、昼間定時制課程の併置を含めた定時制課程のあり方や通信制課程の機能を取り入れた学習形態について検討する必要があります。

以上を踏まえ、当地域の県立高校が魅力や特色を発揮し、子どもたちが生き生きと学びこれからの時代を生きる力をつけていく場となるよう、当協議会において次期県立高等学校活性化計画期間中（令和４年度から８年度までの５年間）に当地域の県立高校のあり方について協議を進めるとともに、県教育委員会に具体的な検討を進めるように求めるものです。

４　今後に向けて

当協議会は、当地域の中学校卒業者数の減少や価値観の多様化、環境の変化など伊賀地域の高等学校を取り巻く状況の変化を見据え、子どもたちや保護者のニーズを把握し、進路希望や入学者選抜の状況を踏まえながら、不登校生徒などの多様な生徒の学習ニーズへの対応や、全日制高校の再編を含めた具体的な検討を進めるなど、子どもたち一人ひとりに寄り添った学習環境づくりに向けて協議していきます。

あわせて、当地域の県立高校の活性化に向けて、地域や産業界の協力のもと地域に根ざした学習活動の充実や、効果的な情報発信やＰＲにより学校の魅力をわかりやすく伝える取組などについても、当協議会として協議していきます。

＜参考＞

令和元年度　協議会の開催日

第１回　令和元年１０月　９日（水）

令和２年度　協議会の開催日

第１回　令和２年　９月１４日（月）

第２回　令和２年１０月２９日（木）

第３回　令和２年１２月１１日（金）

第４回　令和３年　２月２４日（水）

令和元・２年度伊賀地域高等学校活性化推進協議会 委員

区　　分	所　属　等	氏　　名	備　考
学識経験者	三重大学大学院 地域イノベーション学研究科　准教授	加藤貴也（かとう たかや）	
有識者	上野都市ガス株式会社　取締役業務部長	西垣浩尚（にしがき ひろなお）	
	中外医薬生産株式会社　取締役管理本部長	岡森久剛（おかもり ひさよし）	
	亀井商事	中谷幸雄（なかたに ゆきお）	
	有限会社テレマーク	櫻井勝一（さくらい かついち）	
ＰＴＡ関係者	伊賀市ＰＴＡ連合会　会長 （伊賀市立霊峰中学校ＰＴＡ）	中村英行（なかむら ひでゆき）	令和元年度
	伊賀市ＰＴＡ連合会　会長 （伊賀市立大山田中学校ＰＴＡ）	西岡浩司（にしおか ひろし）	令和２年度
	名張市ＰＴＡ連合会　会長 （名張市立北中学校ＰＴＡ）	山下卓志（やました たかし）	令和元年度
	名張市ＰＴＡ連合会　会長 （名張市立箕曲小学校ＰＴＡ）	藤原真也（ふじはら しんや）	令和２年度
	伊賀地区県立学校ＰＴＡ協議会　会長 （あけぼの学園高等学校ＰＴＡ会長）	林　理恵（はやし りえ）	令和元年度
	伊賀地区県立学校ＰＴＡ協議会　会長 （上野高等学校ＰＴＡ会長）	松本誠太（まつもと まさたか）	令和２年度
	伊賀市内県立学校ＰＴＡ　代表 （上野高等学校ＰＴＡ会長）	奥谷和久（おくたに かずひさ）	令和元年度
	伊賀市内県立学校ＰＴＡ　代表 （あけぼの学園高等学校ＰＴＡ会長）	手穂悦子（てほ えつこ）	令和２年度
	名張市内県立学校ＰＴＡ　代表 （伊賀つばさ学園ＰＴＡ会長）	山﨑貴子（やまざき たかこ）	令和元年度
	名張市内県立学校ＰＴＡ　代表 （名張青峰高等学校ＰＴＡ会長）	青山浩久（あおやま ひろひさ）	令和２年度
市教委教育長	伊賀市教育委員会　教育長	谷口修一（たにぐち しゅういち）	
	名張市教育委員会　教育長	上島和久（うえしま かずひさ）	令和元年度
	名張市教育委員会　教育長	西山嘉一（にしやま よしかず）	令和２年度
小中学校長代表	伊賀市小中学校長会　代表 （伊賀市立崇広中学校　校長）	増田博（ますだ ひろし）	
	名張市小中学校長会　代表 （名張市立南中学校　校長）	西山尚吾（にしやま しょうご）	
教員代表	小中学校教員　代表 （名張市立北中学校　教諭）	濱田博之（はまだ ひろゆき）	
	高等学校教員　代表 （伊賀つばさ学園　教諭）	山本淳子（やまもと じゅんこ）	令和元年度
	高等学校教員　代表 （伊賀白鳳高等学校　教諭）	太田昌幸（おおた まさゆき）	令和２年度
県立学校長代表	伊賀白鳳高等学校　校長	徳田嘉美（とくだ よしみ）	
	名張高等学校　校長	中山隆之（なかやま たかゆき）	
	名張青峰高等学校　校長	吉田淳（よしだ じゅん）	令和元年度
	名張青峰高等学校　校長	赤塚久生（あかつか ひさお）	令和２年度

（事務局）　県教育委員会事務局 教育政策課

参考資料

伊賀地域の中学校卒業者数の推移と予測（含社会増減）

令和2年5月1日　教育政策課調べ

	中学校卒業年月	H 29.3 卒業	H 30.3 卒業	H 31.3 卒業	R 2.3 卒業	R 3.3 現中3	R 4.3 現中２	R 5.3 現中１	R 6.3 現小６	R 7.3 現小５	R 8.3 現小４	R 9.3 現小３	R 10.3 現小２	R 11.3 現小１
伊賀地域計	卒業者数	1,530	1,549	1,503	1,449	1,425	1,436	1,374	1,385	1,362	1,327	1,349	1,303	1,257
	前年度対比		19	-46	-54	-24	11	-62	11	-23	-35	22	-46	-46
	R2.3対比					-24	-13	-75	-64	-87	-122	-100	-146	-192
伊賀市	卒業者数	841	829	829	807	768	788	738	740	689	685	701	665	642
	前年度対比		-12	0	-22	-39	20	-50	2	-51	-4	16	-36	-23
	R2.3対比					-39	-19	-69	-67	-118	-122	-106	-142	-165
名張市	卒業者数	689	720	674	642	657	648	636	645	673	642	648	638	615
	前年度対比		31	-46	-32	15	-9	-12	9	28	-31	6	-10	-23
	R2.3対比					15	6	-6	3	31	0	6	-4	-27
伊賀北部	卒業者数	758	749	761	747	706	727	679	684	611	626	638	605	588
	前年度対比		-9	12	-14	-41	21	-48	5	-73	15	12	-33	-17
	R2.3対比					-41	-20	-68	-63	-136	-121	-109	-142	-159
伊賀南部	卒業者数	772	800	742	702	719	709	696	701	751	701	710	698	669
	前年度対比		28	-58	-40	17	-10	-13	5	50	-50	9	-12	-29
	R2.3対比					17	7	-6	-1	49	-1	8	-4	-33

※　伊賀北部＝伊賀市から旧青山町を除く。
※　伊賀南部＝名張市に旧青山町を加える。

伊賀地域県立高校の１学年学級数	29	29	28	27	27								
（　）内は入学定員の計	(1,160)	(1,160)	(1,120)	(1,080)	(1,040)								